

【小説部門・優秀賞】

春色フレーム

私立立命館慶祥高等学校 第3学年 後藤浩介

指フレーム。左右の親指と人差し指をL字にして、組み合わせて四角を作り、その中を覗く。

私はこれが好き。本来は構図や画角なんかを探ったり決めたりするものだけど、私はこれを使って「即興風景画」を作るのが好き。

私には六つ上の従姉がいる。その従姉——私が「お姉ちゃん」と呼んでいるその人は、昔から絵を描くのが好きだった。

私が物心ついた時には毎日絵を描いていた。お姉ちゃんは私が生まれた時から面倒を見てくれていたから、私もお姉ちゃんの真似をして絵を描いていた。

色んなことを教えてくれた。その中の一つが指フレームだった。

最初はお姉ちゃんがよくやっていたのをよくわからないまま真似したのが始まりだった。

すると、指が額縁になって、囲われた部分が一瞬で絵になった。「おねえちゃん、これすごいいね！」なんて言ったのを覚えている。

そんな私も今は中学生になった。今日は休日。お気に入りの服で、来た人を待つ。

髪を纏めて前に垂れているシュシュをそわそわ手で触って、ほんのり笑みを零す。

ピンポーン——

来た。「はい！」と座っていたソファから飛び上がり、玄関へと駆ける。

「よっ、心優。元気してた？」

扉を開けると、待ち人の快活な笑顔がある。

「お姉ちゃん……！ おはよう！」

「うん、おはよ。元気そうだね」

大人びたその人は背が高く、私を見下ろすその眼差しは優しい。長い髪は伸びた背を強調するように腰まで真っ直ぐ降りている。

「だって、今日お姉ちゃんとお出かけのためにちゃんと整えてきたから」

「あはは、いつもそうじゃない？ 毎回それじゃ、疲れちゃうよ？」

「お姉ちゃんのためならへっちゃら！」

両腕を曲げ筋肉隆々のポーズで鼻を鳴らす。

「こんな細い腕で何を言うか」とお姉ちゃんに二の腕をふにふにされる。くすぐったい。

「それじゃいこっか」

「うん！」

私は促されるままお姉ちゃんと玄関を出る。家の前には、一台の白い車が止まっていた。

何ヶ月か前、お姉ちゃんは免許を取った。そのおかげで最近はお姉ちゃんに車に乗ってドライブする

ことが多くなった。お姉ちゃんが大学に入ってから続いている毎週日曜のお出かけが、最近さらに待ち遠しくなった理由の一つ。

ピッ、とお姉ちゃんが車のライトを鳴らす。その「入っていいよ」の合図で私は助手席に飛び乗る。未だに慣れない、車の匂い。お父さんの車とは違う、新鮮な匂い。これからどこか遠くへ連れ出すと教えてくれる。

慣れなさが掛け合わさって、左肩に乗ってるシュシュに触れる。車の準備に夢中になっているお姉ちゃんに目配せをする。

「シートベルト締めた？ ……なに、そんなに自分のシュシュ気になる？」

「……べっつにー」

お姉ちゃんが私があからさまに不機嫌な私の顔を見て、なにか察したらしい。

「もしかして、なんか変わった？」

「……ほんとに気づいてないの？ シュシュの色、変えてみたんだけど」

お姉ちゃんのとのお出かけの為に三日前、いつもの赤から黄色へと変えてみた。雰囲気ガラッと変わったからすぐ気づいてくれるものだと思ったけど。

昔のお姉ちゃんは、爪を切ったことにも会った瞬間に気づいてくれるくらい私のことをよく見てくれていた。しかし、最近はどこを変えてもあまり反応してくれない。

「えっ……ああごめん、気づかなくて……」

物憂げな表情は目を合わせてくれない。

「いいよ。それより、早くお出かけしよ？」

「……そうだね、よし。じゃあ、出発ー」

静かな加速に心地よく揺られる。目的地もない、二人一緒にいるためだけのお出かけ。

空は澄んで、草木は淡い緑に色づいて。自然が多いこの辺りは、その色が重なって深い緑を作る。そこに桜の淡いピンクが濃い緑に塗り潰されず鮮やかに混ざって春を感じる。

雪が解けると共に学年が一つ上がった私たちは、去年の春と変わらない話をしていた。

大学二年生になったお姉ちゃんは、大人っぽさが増した。凜としてて、カッコよくて、綺麗。でも、最近笑った顔が少なくなった。「中学生になってから一年経ったのに、子供っぽさ抜けないねー。私も心優もおんなじ二年生なんだけどね」

「全然違うよ！ 六歳も上でしょ！」

いたずらに笑うお姉ちゃんに頬を膨らませる。子供っぽいと言われたそばから。

ぼーっとしながら窓の外を眺める。窓に向かって指フレームを重ね合わせる。額縁の中で、空の遠い青を背景に草木が息をしている。

走っている車の中だと、風景が流れる。最近はそれで即興風景画を動かすのが好き。

「好きだよねー、それ」

「お姉ちゃんが教えてくれたんだよ？」

「教えたっけなあ……少なくとも、それで即興で絵作るのは教えてない」

「かもね。これ、車の中だと面白いんだよ？絵が動くみたい。動画？ なのかな、これ」
移ろいゆく絵は、草木から広い海へと開けた。白い波が寄せる海は、当たり前だけど誰もいない。

絵を眺めているうちに海を眺められそうな広場を見つけた。

「こんなところあったんだ」

「確かに、私も知らなかったかも。寄ってみる？」

「いいかな。反対車線側だから、お姉ちゃんめんどくさいでしょ」

「そこなの？ 変なところじゃっかりしてるよね心優……」

そのまま海を通り過ぎて、また草木に隠れた。その後見つけたカフェで早めの昼食を食べたり、その近くにあった水族館に気まぐれで入ってみたり。文房具屋さんで昨日使い切ったクロッキー帳を新調しながら新しく思い出に積み上がったそれは落書きばっかだったなんて話をしたり。空が赤くなったのにも気づかないまま時がどんどん経っていった。

月曜日。私は自転車を漕いで学校へと向かう。気持ちはもう次の日曜に向いていた。

「桜、もうどこもかしこも満開だなあ」

自転車を漕ぎながら辺りを見渡す。気になるものが目につくとついついそっちの方向に行ってしまうから、私の通学路は安定しない。

ふと昨日のことを思い出す。車の中で桜を指の中に入れていた時のこと。移ろう景色を指に収めるのは、自転車でもできるかも。

私は漕ぐスピードを速めた。車の中では感じられなかった風を感じられて心地がいい。

「ちょっと。ちょっとだけ……」

自転車から手を離し、指フレームを作った。

その時、自転車がバランスを崩し、額縁の中がぐらっと揺れた。咄嗟に手を戻しても、遅かった。自転車は勢いそのまま縁石に躓き、私は飛び込むように転んだ。

ズサッと大きな音がした。痛い。ヒリヒリして、打ちつけられた衝撃で呼吸がうまくできない。痛みを受け止めるのに必死で目が開けられない。「大丈夫かー！」と遠くから人の声が聞こえる。痛みが意識を揺らす頭の中では、その声がこだまして耳に入っていない。

気がつくと、救急車に乗せられていた。そのまま病院に連れていかれた。着く頃には、痛み慣れて、頭の中が整理できるくらいには意識は戻ってきた。

病院で診てもらおうと、大きな怪我はないみたいだった。

迎えには、お姉ちゃんが来てくれていた。親は仕事で忙しくて、来れないみたいだった。学校には休むと連絡を入れてくれたらしい。そのまま、今日は家に帰ることになった。

帰りの車は静かだった。沈んだ気持ちが顔を上げる音もしない。

私は窓の外を眺めた。流れる景色に、少し物足りなさを感じる。

窓に指フレームを重ねた。腕に残った痛みが虚しさをズキッと滲ませる。それでも、沈

んだ気持ちを慰めるのには最適だった。

「ねえ、それさ……もうやめない？」

不意にお姉ちゃんがそう言った。

「……どうして？」

私は窓の外を見ながら固まった。今一番聞きたくなかった言葉が耳に入ってきたから。

「ほら、また今日みたいなことあったら、危ないしさ……」

私はお姉ちゃんの方をゆっくりと振り向く。驚いてしまった。お姉ちゃんが悲しそうで、何より、辛そうな表情を浮かべていたから。

「もうあんなことないように気を付ける」

「そうじゃなくて……それに子供っぽいし」

「子供っぽいとか、関係ないよ。私はこれが好きなの」

「そんなにやってたら、飽きちゃうよ」

「飽きるはずない！ お姉ちゃんが教えてくれたことだもん。……今日のお姉ちゃん、おかしいよ。なにかあったの？」

返答はなかった。大きい声を出したせいで、まだ引かない痛みにも少し意識が揺れた。

しばらくして、昨日見つけた海を眺められそうな広場が見えてきた。そのとき、「ゆっくり話せるところにいこっか」とお姉ちゃんが口を開いて、その広場へと停まった。

「んんっ……ふう。風気持ちいいね。ほんと、なんでこんなとこ知らなかったんだろ」

伸びをして私に笑いかけるお姉ちゃんの顔は、見るからに空元気だった。

閑散とした広場には、草むらの絨毯が潮風に揺れて、端っこにベンチがぼつんとあった。海より少し高い場所になっていて、フェンスが砂と草の境目を遮っている。

「誰もいないし、案外他の人にも知られてないのかもね」

押し寄せた波が静かに砂浜を削って帰ってく。

「……ねえ心優。ここの景色は、どんな色に見える？」

「色？」

不意に言われて戸惑った。言われたまま私は周りをゆっくり見渡して、思いつく言葉を一つ一つ並べていった。

「……海は深い青で、空は澄んだ水色。雲は少し灰色っぽくて、地面の草は緑。ちょっと横には桜が淡いピンクに咲いてる」

そこまで言った辺りでお姉ちゃんは「そっか」とだけ零して目を合わせてくれなかった。

ひゅー、と吹く風の音が流れる空気を静かにさせる。潮風のしょっぱい匂いが過ぎ去る前に、お姉ちゃんは口を開いた。

「私には、全部くすんだ色に見えるよ」

お姉ちゃんは悲しさも、寂しさもないまぜにした表情で海を見つめたままだった。

「えっ……どういうこと？」

「色盲なんだって、後天的な。どんどん色が褪せていって……今はもう、絵も描けない」
風の音が聞こえなくなった。海を眺めた。さっきと違って、何かが抜け落ちた気がした。けれど、私の視界には色はついたまま。とてつもなく、鮮やかに。

「……いつから？」

「半年前……大学入った少し後からかな」

今まで気づかなかった自分を恨む。考えてみれば、予兆はあった。私の細かい変化に気づいてくれなくなったこと。昨日だって、シュシュの色が変わったことに気づいてくれなかった。気づかなくて当然だったんだ。

「それじゃあ……もう、お姉ちゃんの絵は見れないってこと？」

答えてくれなかった。こちらを向いてすらくれなかった。私が一番傷つくとわかっているから、無理して笑顔を作ろうとしてる。

「……やだ、いやだよっ！ 私、お姉ちゃんの絵、大好きなのに……！」

「ちょっ、心優……！」

どこにぶつければいいのかわからない感情をお姉ちゃんの懐に飛び込んで両手の拳でポカポカ当たった。お姉ちゃんに痛そうな感じはない。代わりに、私が痛かった。

お姉ちゃんを困らせるだけなのは分かっていた。それでも、涙が滲んでくる。

「ごめん、心優……」

「どうして謝るの？ お姉ちゃん何も悪くないよ……」

やるせない、けれどどうすればいいかわからないぐちゃぐちゃの感情。

「ううん。まだ身体痛いのに、こんな気持ちにさせちゃったし、私が絵を描けないのを思い出すからって指フレームやめさせようなんかしてさ、身勝手に当たっちゃったし……」

お姉ちゃんは私に腕を回した。傷が痛まないように、セトモノを扱うように、優しく、触れてくれた。抱き寄せる代わりに、お姉ちゃんから近くに寄ってくれた。

背中を撫でられるたび、気持ちが少しずつ落ち着く。それとは裏腹に、涙がどんどん零れて、胸の内のぐちゃぐちゃも広がる。

「シュシュ変わったことにも気付けないくらい心優のことわかってないくせに、心優のこと泣かせちゃうなんて……これじゃあお姉ちゃん失格だね」

「っ！ そんなことな——！」

震える声に焦って否定しようと上を向くと。ぼたりと私の頬に水滴が垂れた。

お姉ちゃんが、泣いている。

初めて泣いているところを見た。怪我をしても、お母さんに怒られても、私の前では絶対に涙を見せなかったのに。

「……色のない心優を見るのが怖い。心優の変わった部分に気づけない自分が嫌い……」

目の周りが赤くなって、くしゃくしゃに辛そうな表情。

こんなに悲しかったことを、ずっと隠してたんだ。こんなに辛いことを、私の指フレームを見るたび、思い出してたんだ。私を悲しませない一心で。

胸の中で混ざった色々な感情が灰色になって、黒くなって。

そんなの、いやだ。お姉ちゃんが苦しんでしまうのなら、やめられる。けど、それでお姉ちゃんの苦しさがなくなる気はしない。

「そんなこと言わないでよ、そんなの悲しいよ……私はお姉ちゃんが大好きなのに……」

お姉ちゃんの服をぎゅっと握る。潮風の匂いが先ほどより辛く感じる。

どうすれば、お姉ちゃんが笑顔になれるんだろう。こういうとき、お姉ちゃんならすんなり解決してしまうのに。

私が壁に当たったとき、絵を描くのに躓いたとき。お姉ちゃんは線を足してくれた。色を作ってくれた。私の欲しかった色を見透かしたように、スケッチブックの上に色を足してくれた。そんな風に、私もできたら。

……違う。私は、いつだってお姉ちゃんの真似をしてた。絵を描くときも、なにやるときも。それなら。

「……お姉ちゃん、私と一緒に絵描こう！」

真っ直ぐ目を合わせる。お姉ちゃんの瞳は少し曇ってしまっている。驚いたお姉ちゃんは、私の勢いに気圧されて、少し後ずさる。

「えっ、それってどういう……」

「お姉ちゃんが線画を描いて、私が色を塗るの」

私が困ったときにお姉ちゃんが色を塗ってくれたなら、私もお姉ちゃんが困ったときに色を塗る。それしか、私にはできなかった。

ぼかんとした顔で見つめられる。

「お姉ちゃんの見る景色を、私が色づける。お姉ちゃんを感じる気持ちを、私が色にする。……だから、お姉ちゃん。もう一度、絵を描こう？」

私のうなじ辺りに置かれたお姉ちゃんの手を包んで、胸の前に持ってくる。お姉ちゃんみたいに抱き寄せられないけど、一生懸命、握った手からぬくもりを伝える。

「……うっ、ひっぐ」

「お姉ちゃん……」

瞑ったお姉ちゃん目にさらに涙が溢れる。だめだった。私なんかじゃ、お姉ちゃんみたいになれなかった。

胸の中で何かがふっ、とどこか暗いところに落ちてしまった気がして、俯いた。

「ぐすっ……もう！ 成長したな一心優！」

「うわっ！ なに、なに!？」

身体を仰反るほど勢いよく抱きつかれて、目をぱちくりさせた。

「痛い、痛いよお姉ちゃん……」

「ああっ、ごめん！ 痛いよね、ごめんね」

慌てた様子ですぐに解放される。瞬間シュツと痛みが全身に走って、少し顔を顰めた。

「ほんとごめん、嬉しすぎて……心優がき、私が色を塗るって言うてくれて、ほんとに嬉

しい。私を慰めてくれることも、心優が、頼っていいよって言うってくれることも。私のために、私が絵を描くのを諦めなくて済むように。それが、嬉しくて……」

たどたどしい言葉とともにまたお姉ちゃんから涙が零れてきた。私はそれが落ちてしまわないように手で拭う。

「違うよお姉ちゃん。私は、一緒に描きたいの。お姉ちゃんの描く世界を、私も一緒に歩いて、私の気持ちも、色にしてのせてみたい。それだけ」

本当は、お姉ちゃんに好きなものを諦めて欲しくない一心だけど。少しカッコつけた。でも、その気持ちも嘘じゃない。

「それに、お姉ちゃんが教えてくれたんだよ。私が困ってる時、一緒に絵を描いてくれたから。だから、今度は私の番だって」

「……そっか。私を見て私を救ってくれるって、粹なことするじゃん……ありがと、心優」
少し屈んで、視線を合わせて撫でてくれた。それは優しく、暖かくて、安心した。

落ち着いてから、二人で端っこにあるベンチに座った。海と砂浜と広場が眺められて、一瞬でお気に入りスポットになった。

指フレームを作ってその画を目に焼き付けようとする。

「一緒に描くって、言ってくれたじゃん」

すると、横に座っていたお姉ちゃんが、フレームの左下半分を担っている指を下ろして。自分の指でそこを埋める。

「これなら、一緒に描ける」

お姉ちゃんが少し体を私の方に傾けて微笑みかけてくれる。重なり合った指を見る。

穏やかに風ぐ海原。どこまでも続く水平線が、遠くで空の青と溶け合っている。

初めて一緒に描く絵。二人の指で作られた絵に、胸の奥がジンと滲んだ。

「もうちょっと上の方がいいんじゃない？」

お姉ちゃんが腕を上を持ち上げてフレームをずらす。

「えー、それじゃあ空しか映んないよ」

「それは心優の身長が低いからだよー。私からはしっかり地面まで映ってるよ」

「お姉ちゃんが大きいんでしょ！ それに私成長期だもん、これから伸びるもん！」

「それにしては身長伸びてる気しないなー」

反抗心から立ち上がって覗く。角度が変わって、海の反射が変わる。私は目を輝かせた。

お姉ちゃんから見た景色は、こうなんだ……私と全然違う。

面白くなって、笑ってしまう。嬉しくて、涙が滲んでしまう。

これから描くお姉ちゃんの景色も、私の景色も、二人の気持ちも。一つの絵に、落とし込められたらいいな。